

## 『反体制的考察』を読んで

この何ヶ月かの間に、ここ十年来一緒に運動を担っていた仲間が、次々と第一線を退いていった。共産主義という座標軸を失って、価値観的に混乱しているのではと考えたのだが、人それぞれ理由を聞いてみるとどうも違うらしい。ある人は環境運動をもっと積極的に担いたいと言い、ある人は自分の精神世界を極限にまで高めたいのだと言う。それでは、今までブントの中で実践したり考えてきたりしたことは、一体何だったのかと問いたくなってしまった。

彼らも、当初は「熱いパトス」をもっていたに違いない。しかしその情熱の火が消えてしまったとすれば、何とも悲しいことだ。気持ちを汲んであげるのが残された者の務めだとはいえ、何ともやりきれない思いだ。

私自身も何年か前に自分の不甲斐なさからブントを離れ、仲間の熱意を持った説得でもう一度やり直す気持ちで戻ってきた。共産主義という理想は潰えたとはいえ、社会には依然として様々な矛盾や、不合理が満ち溢れている。だから闘う意味があると信じる。

そんな中で、最近出版された『反体制的考察』を読んでみた。一九八〇年代に荒岱介氏が書いた論文をまとめたものだ。結集当時に単語の一つ一つの意味さえわからず読み合わせをしたことが、思い出された。

考えてみれば、八九年のソ連・東欧の崩壊という共產主義の歴史的な終焉を見た後、自由主義の勝利を謳歌するはずの世界は、湾岸戦争を始めとして泥沼の戦争状態へ踏み込んでいった。イラク戦争に至る今日でも、それは変わっていない。大国のエゴに蹂躪される貧しい国々という構図を糾したいというのが自分の出発点であり、闘う端緒である。

当時の気持ちを思い起こしながら、現在の自分にとっての意味を問い直すものとして、読み直してみたいと思った。

## 主体的であるとは何か

この本には「共產主義的主体と党風」及び「革命戦争を生き闘う指導主体のガイスト」という二つの文章が掲載されている。わたしたちはこれを第一・第二主体性論文と呼び、社会変革を担う変革主体への飛躍をかけて、当時この論文と向き合った。

まず、「共產主義的主体と党風」、いわゆる第一主体性論文というのは、一九六九年当時の第二次ブント崩壊のきっかけとなった赤軍分派や、革共同両派の内ゲバ闘争の激化という新左翼運動の行き詰まりに呼応して、一九七四年に書かれた文章である。

荒氏は中国毛沢東の革命思想、「人民一人ひとりの魂にふれる革命」を評価し、「理論的なあやまりはそれと

して踏まえつつ、党風や作風の問題として、党の人民に対する態度の問題として」(『反体制的考察』p86、以下こ  
 とわりのない場合、引用は本書)これを学んでいったのである。

内ゲバ闘争に連なるセクト主義の害悪を、荒氏は毛沢東のいう主観主義のあやまりとして捉える。「主観主義  
 のあやまりは、毛沢東の言葉でいえば教条主義と経験主義(＝理論主義と素朴実践主義)のもたらす弊害」(同  
 前 \*括弧内は田畑注釈)であり、観念化された理論それ自体の発展を自己目的化するようなあり方を廃して、  
 現実を出発点に、対象化した事象を人民にもっとも容易でわかりやすい仕方でおこなう必要性を訴えている。

「現実の大衆が生活しており、存在している場、そこにどんな問題があり矛盾が潜んでいるのかを、最も平  
 易な言葉で、わかりやすく、しかもマルクス主義的に説明すること、それが要求される」(同前)と荒氏が言うと  
 き、内ゲバなどによって人民から遊離してしまった新左翼運動の再生を実現しようとする強い決意を感じる。

そして荒氏は対象変革というのは、すなわち自己変革であると言う。「主体が対象を獲得していくためには、  
 主体そのものが対象のおかれている関係性を知り、そのような関係性の中の意識＝状態をつかみ、その立場で  
 物を考え、思考し、そうしてそれを自己の立場＝関係性からとらえなおすことによって批判を加え、ということ  
 は実は経験を交流するということですが、過程的なものでしかない自己自身の変革ということをもバネとしつつ、  
 対象を獲得するようつとめる」(同前)というのだ。

これはマルクスの説いた主体と自然との弁証法を用いた演繹であるが、廣松渉氏のいう「フェアエス・フェア  
 ウンス機制」と同様な主客の共同主観性を問題にしている、マルクス主義や、当時の社会世相とは無縁な若者  
 にも、充分納得できる内容だと思う。

そしてその場合、変革すべき対象を、あるがままの状態で把握するという感性的把握になることを廃して、「そ  
 のものが有している運動原理、法則性といったものをつかみとることが必要」(p88)になる。これは、相手の置

かれている立場に身を置いて、その社会的関係の中で相手の論理をつかみとるということであり、これを荒氏は「対象認識における概念的把握＝理性的把握」(88)と呼んでいる。

このような概念的把握に基づく、対象変革＝自己変革の姿勢を荒氏はプロレタリア性と呼び、変革途上である不完全な主体が、社会変革という課題に自己投機していく過程がプロレタリア革命運動であるというのだ。

これだったら、別にわざわざ共産主義運動という主義主張をつける必要も無いと思うし、現在においても充分通用する課題であると感じる。ただ、当時の時代状況とアナロジーさせてみれば、このような普遍的課題を掲げること自体が大変な状況であったということを見るのでなければならぬだろう。問題なのは、自分の置かれた時代状況の中で、なにができるかということに尽きる。

さて、次に八三年に書かれた「革命戦争を生き闘う指導主体のガイスト」、いわゆる第二主体性論文と呼ばれる文章を見ていく。

第一主体性論文から九年を経て、時代状況はどうなったのかというと、日米安全保障条約の具体化で、日本政府が総力を挙げて取り組んだ公共事業、成田空港の七六年開港を、実力で阻止した三里塚闘争が、大衆運動として輝かしい成果を残す半面、それ以降またもや内紛を起こし、北原派と熱田派に分裂してしまう。

当時、北原派の最大党派であった革共同中核派から「脱落派」というレッテルを貼られ、一方的に党派戦争宣言を宣告された当時のブント(戦旗・共産同)は、三里塚闘争の大義を守り、内ゲバを回避するために、成田空港二期工事を実力で粉砕する、対権力闘争に入っていくのであった。

とはいえ、革命運動は第一主体性論文でも提起されていた通り、自己変革＝対象変革の運動なのだから、当然権力打倒が自己目的化されるような、暴力を肯定するような内容ではありえない。「普遍的本質性においては人間主体の有する総合的普遍的緒力の全的発現を実現するもの」がメインテーマであるが、「具体的現実性に

あつては、共產主義社会の建設という明確な目的意識性を持った「革命党と革命勢力」（＝共同体）内部での主体形成（*being*）が志向されていたのである。

「普遍的人間」という課題は、『ドイツイデオロギー』の中でマルクスが提起した理想の人間像であり、現在から見れば多少観念的な存在である。しかし対象変革＝自己変革というプロレタリア革命運動のダイナミズムのなかで措定されていた限りにおいて、実践的な意味合いを帯びてくるのだ。

それはともあれ、荒氏はそこでの協働性のうちに自己変革＝対象変革が実現されていくと言う。「個から出発したおのれが革命組織＝共產主義的共同体の一員となり、そこでの共働主観（性）を次第に自己の世界観、思想性として自己と一体のものとなし、対象的世界の変革にむけて実践をかさね、そこで学び、そこにおいて必要とされる諸力を自己のうちに創造し、豊富化させる、その弁証法的な連関構造こそが実体的な主体形成のあり方」（*pp.10*）＊括弧内は田畑注釈）なのであり、そういった組織創造性を豊富化していくことが、抽象的ではなく実践的な普遍的人間への接近につながっていくのである。

とはいえ、現実の運動にあつては、武装闘争の進展の中で、当然ながら権力弾圧が強化されていく。そこでいろいろな主体の途上性が出てくるのだが、その中でも「倫理的主体形成」というものに注目してみたい。

荒氏は七〇年代初頭の武装闘争遂行時に陥った例として「禁欲主義、耐乏生活の考えは、現実の組織発展を著しく困難なものにさせ」たと言う。そしてその根拠を「共產主義的共同体と人間関係の形成において、主体が担いきれない実存が理念的に対置され」（*pp.11*）てしまったからだとしている。こういった当該組織を指して、荒氏は「ポルポト的共產主義」とか、「宗教集団的密教化」などと呼んでいる。

要するに、給料の全額上納とか全員アジト生活、党内恋愛の禁止などを強制された倫理的な共同主観性の中で、人間性がずさんでいくことが問題だとされているのだ。「政治目的の鮮明な提起と結合しない党生活の左翼

性の自己目的化は、組織活動の遂行を非常に息苦しいものにさせ、たまに酒を飲んだりするとグ Deng デンに酔っ払い血を吐くまで飲みつづけるとか、鬱積していた感情が爆発して殴り合いになるなどがおこった。」(p.88) 実はその当該組織というのが、私が現在所属しているセクシオンなのだが、さすがに殴りあいまでは至らなかつたものの、その余韻のせいか非常に息苦しかったことを覚えている。

最近、立松和平原作の連合赤軍の映画(『光の雨』)をビデオで見たのだが、集団リンチに至った心的葛藤と、そこでの共同主観性の在りようは凄まじいものだった。環境が変われば人間はこうも変わってしまうのかと思った。

それに対し、荒氏は当時の政治状況下にあっても「必要最低限の生活の保障をなし、できればより快適な状態を何とかつくりあげていこうとすること」(p.80)を提起している。政治的な共同体として、信頼関係を築いていく上で、これは大変重要なことだ。私たちのセクシオンでも、何年か前からアジト生活を解除したり、上納体制の見直しを行ったりしている。

その意味では、マルクスが『共産党宣言』のなかで言った「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような協同社会」の実現は、抽象的な革命理論の中にあるのではなくて、具体的な生活の中にある運動だとも言える。そしてそこで問われるのは、共同主観性の高次化であり、たとえ形態的にアジト生活をしていなくても培われる組織創造性である。単に生活が豊かになればいいというものではないが、すさんだ気持ちから豊かな組織創造性は生まれないことは、既に歴史が証明している。

振り返って現在では、形態や時代状況が変わったとはいえ、アメリカのイラク戦争に反対し、自然破壊の公共事業に反対して抗議すれば、当然弾圧を受ける。ワールドピースナウに集う高校生だって例外じゃない。冒頭で言った後退した仲間ではないが、単なるエコロジストだつてもものすごい弾圧を受けながら、自然保護の為に闘

っている。宗教者だって殺生を許さないという信念をもって戦争反対を叫んでいる。だから、そういう状況の中で自分はブントではなくてエコロジストになりたいとか、宗教者になりたいというのは単なる逃げでしかないと思う。

「自己にはじまり自己に還帰するだけの自己完結的な主体形成（＝小ブルジョア的自己形成）にあっては、組織を媒介とし共同主観を構築しつつ対象にかかわるモメントを持ち得ないのであるから、当然階級的主体形成とは位相を異ならせることになり革命的なものとはなりえないのである。」（P372）

目指すものは変わっても：

最近リチャード・ローティの著作をワークショップで取り上げてから、アメリカのプラグマチズムに対する関心をもった。ローティが自身の思想の拠り所になっているのが、ジョン・デューイの自由主義思想である。

今回は文章化にまでは仕上げられないが、本拙文を締めくくるにあたって、デューイの著作からの引用をしておきたい。「自由主義の目標は「各人の自由な能力開発」……《自由主義の本質は、個々人が自らの能力を開発することにおいて、何の束縛も受けるべきではないとしている点である。》したがって、自由主義は、その目標に忠実であるためには、その目標を達成することを条件とする手段を求めるべきである。」（デューイ『自由主義と社会行動』1989 明石紀雄訳 P32）デューイの言う自由主義とは、私たちが普遍的人間への接近という言葉で言い

表してきた事と、多くの点で重なる。

そして次のデューイの言葉「《…自由主義は今や、これらの貴重なもの（「自由主義が目標として掲げてきた自由な人間精神、および個人がその能力を発揮できる機会の保証」）がいつときといえども失われることなく、むしろ強められ、今この場で拡大されるべく、あらゆるエネルギーを傾け、あらゆる勇気を凝集するという課題を果たさなければならぬのである。》」（同p.24）という言葉の中に、私たちとの近似性を見ることは容易だ。

人間の自由な発展の障害は、例えば環境破壊であったり、戦争であったりする。その障害を許さず闘い権利を勝ち取ることの中に、人間の普遍的な発展の途も開けるのではないかと思う。だから私は（当事者に失礼な言い方かも知れないが）エコロジストや宗教者でなくブントでそれを目指したいと思うのである。

（2003.08）